

森づくりビジョン

「宝が池の森」保全再生協議会

1. はじめに

かつては里山として、京都を代表する民俗文化・五山の送り火の一翼を担う山として、多様な生き物が生息する環境として、気軽に訪れられる広い公園として、様々な形で、京都の人々の暮らしと共に歩んできた、山紫水明の都を象徴する、まさに「宝」のような森。それが、宝が池とその周辺に広がる「宝が池の森」です。

この大切な場所に、近年さまざまな変化が起っています。生活様式の変化などから人の手が入らなくなり、荒廃した森へ変化しています。マツ枯れやナラ枯れの被害、さらにはシカの増加に伴う食害、外来種の拡大などによって、生物多様性が急速に失われています。

このような中、「宝が池の森」保全再生協議会は、この森を未来に継承するために、私たちができることを考え、実行することを目的として、2015年に発足しました。

この度、この森が直面する危機、そして目指すべき姿をより多くの方と共有し、多様な主体が連携して行動する機運を高め、持続可能な保全・再生・利活用の取組へつなげるために、「森づくりビジョン」を作成しました。

2. 「宝が池の森」の特徴

2.1. 自然環境

京都三山の一つ北山の最南端に位置する小丘陵地に位置し、尾根、斜面、谷といった地形に応じて、アカマツ林、コナラ・アベマキ林、シイ林、スギ・ヒノキ林が分布しています。春から夏にはコバノミツバツツジに象徴されるツツジ類や多彩な木々の花が見られます。

尾根と谷が入り組み、小規模な集水域が組み合わさることで、環境の多様性がみられます。谷には湿地が形成され、宝が池や岩倉川、高野川へとつながり、森と水辺が連続することで、多様な生きものの生息環境になっています。西側には、生物群集全体が国指定天然記念物に指定されている深泥池が位置しています。

2.2. 歴史文化・暮らし・景観

五山の送り火「妙法」を抱え、京都に欠かせない民俗文化を象徴する森です。京都三山の一つとして京都を縁取り、市街地からの視認性（景観的な重要性）が高く、京都の景観を特徴づけています。その景観は風致地区等に指定され保全されてきました。尾根からは市街地が眺望でき、東には比叡山頂を望めます。

縄文時代から人が集う地域の一画にあり、後に平安・戦国の世に麓で暮らした人々との深いつながりが森の各所に刻み込まれています。地域で大切に手入れし、利用されてきた森であり、周辺の農地や集落と合わせ里山としての原風景を垣間見ることができます。

2.3. 公園利活用

宝が池の森を含む宝が池公園は1942年に防空緑地として都市計画決定され、1962年に着工された国立京都国際会館の建設に伴い施設整備が進み、子どもの楽園、梅林園、菖蒲園、憩いの森、桜の森、野鳥の森が整備され、広域公園として供用されています。

四季折々に表情を変える森林景観や、宝が池の水面が織りなす雄大な景観は憩いの場となっています。池の周囲は散歩やランニングなどの健康づくりの場として、子どもの楽園を中心とした園地は家族連れでにぎわう遊び場として、また、小学校や幼稚園・保育園の遠足の場として、多様なレクリエーションに利用されています。

里山の植生や水辺とのつながりが残存し、かつての暮らしや日本人が親しんできた生物の豊かさを身近に感じることができる貴重な森が公園内にあります。

個人や NPO などにより、観察会や学習会などのプログラムが実施され、一部では森林の手入れも始まっています。また、長年、大学等による森林環境の研究の場となっています。

3. 課題

3.1. 自然環境

- 松枯れ(1965年頃から)やナラ枯れ(2010年頃から)の進行による植生の変化
- 植生遷移の進行による常緑広葉樹林化、高木林化

1960年頃から植生遷移の進行に伴って常緑広葉樹が増えてきました。1965年頃からは松枯れの広がりによるアカマツ林の衰退とコナラやアベマキなどの高木林化が進みました。2010年頃からはカシノナガキイムシによるナラ枯れが拡大しました。倒木や落枝が各所で発生し、公園園路沿いや民家の裏山で危険木が増加しています。

- シカの増加にともなう食害の広がり
- 森林植生の種の多様性の低下と更新阻害
- 下層植生の衰退による表土流出
- 外来種の侵入

2010年頃からの野生シカの増加により、草本層と低木層の消失や衰退が顕著になっています。樹皮剥ぎによる垂高木の立枯れもみられ、森林の更新が阻害されています。希少な植物が消失し、ツツジ類等も減少しています。一方、シカの嗜好植物や外来種が増加し、種の多様性が低下しています。周辺に植栽されているナンキンハゼ(外来種)の種子が鳥によって森林に運ばれ、林相を変化させています。植物相の変化は、そこに生息する動物相にも影響を与えています。下層植生の衰退により、表土の流出が増加し、谷部では浸食が顕在化しています。

- 宝が池の種の多様性の低下(外来種の増加、底生動物の減少)
- 湿性遷移の進行と土地改変による水陸移行帯の減少

池畔や湿地にみられる、水辺から陸への移行帯が衰退しています。宝が池の魚類はオオクチバス、ブルーギル、コイが優占し、小型の在来魚やヤゴ類などの底生動物が減少しています。浮葉植物であるジュンサイなど、深泥池でみられる水生植物の生育記録がありますが、現在はみられません。かつて、宝が池周辺は広大な湿地帯でしたが、公園や国際会館、住宅などの整備により改変され、ハツチョウトンボの生息が途絶えました。近年、シカの食害による下層植生の減少による表土流出の増加により谷部の湿地帯が埋まり始めています。

3.2. 歴史文化・暮らし・景観

- シカの食害など森林環境の変化による火床の立地の劣化
- 京都の森林景観の主要な構成要素であるアカマツ林の衰退

1300年の歴史のある祭事である五山の送り火に使うマツは、松枯れ被害の広がりや森に人の手が入らなくなったことによるアカマツ林の衰退に伴い、地元では調達できなくなりました。アカマツ林の樹形がつくる眺望景観は、歴史文化的にも重要な景観であり、その再現が課題となっています。火床の斜面では、下層植生の減少に伴う表土流出が増加し、管理作業や火入れにも支障が生じています。

- 高木林化や下層植生の減少による表土流出などにより高まる災害に対する脆弱性
- 地域の暮らしと森の関係の希薄化、失われる森に対する興味や関心

山麓を中心にシイやアベマキの高木が多く、樹勢が弱った木も散見されます。特に民家に接する南斜面や東斜面は傾斜が大きく、台風や豪雨に伴う倒木が懸念されます。また、樹木の根返り(倒木)や斜面ではガレや大きなくぼみの発生が増加しており、災害につながるものが心配されます。しかし、地域では「自分たちの山」として捉え、危機感を共有することが難しくなっています。

地域による森の利用が行われなくなり、森から糧を得て利用し続けるための知恵や手法も引き継がれなくなっています。数十年前までは、柴山として利用管理されることで継承されてきた、南山腹の低木主体の植生景観と眺望の維持が課題となっています。

- 歴史的資源の活用

尾根には山城跡等がありますが、アクセスは制限され保存対策がとられていません。麓の社寺等とともに地域の歴史を色濃く残す森であることが広く知られていません。

3.3. 森の利活用

- 池の周囲や林縁園路および広場に集中する公園利用と限定的な林内利用

子どもの楽園によるプログラム利用や森の幼稚園、市民グループなど、一部の団体のみが森を利用しています。遠足で子どもの楽園を訪れる小学校や幼稚園、保育園のほとんどは林内を利用していません。マラソンや散策などの公園利用は池周囲や広場に集中し、森を利用する人は少ないです。都市近郊に位置する宝が池の森が有するポテンシャル(便利なアクセス、自然条件、規模、わかりやすさ、歩きやすさ等)が活かされていません。

- 森林の荒廃による林内利用体験の質と安全性の低下

マツ枯れやナラ枯れなどによる植生の荒廃は、森林環境の多様性を減少させ、あそびや体験の質を低下させています。また、枯死木からの落枝や倒木などのリスクの高まりは、林内での安全・安心な活動を妨げています。加えて、近年はシカの増加等によるマダニの分布拡大により、感染症についても配慮が必要になっています。

- 宝が池の森の魅力や課題への理解を広めるための情報共有の不足

林内を気軽に楽しむための情報や機会が公園利用者に届いていません。森の案内や紹介、森の現状や課題の共有に限られた範囲に留まり、身近な森への関心や理解が広がっていません。

- 人と情報が集まる場や仕組みの不足
- 森づくりの活動の輪を広げ、継続していくための体制づくりの不備

森に関わる人や団体の広がり、活動の継続が課題となっています。森に関する様々な情報が集まり、誰でも立ち寄れ、森に関わる機会を得られる場や仕組みがありません。

- 森づくりや拠点機能をマネジメントする体制の不備と資金の不足

森づくりに必要な活動や拠点機能の運営等のための資金が不足しています。主体的で活発な取り組みを支え、かつ行政に頼らない持続的なマネジメント体制が構築されていません。また、森づくりには一定の知識や経験が必要で、活動を主導する人材の確保や育成、プロや企業との連携を含めた体制づくりも求められます。土地所有者、公園や施設の管理運営者、森づくりに携わる利用者等の良好な関係づくりを支える連携の枠組みが必要です。

• 森の保全再生と利用を両立する植生管理計画とルールの必要性

多くの人々が森を利用し、活動を展開するにあたっては、生態系や園路等の施設への負荷を考慮し、地元の人々が長年にわたって実践してきたワイズユース（賢い利用）を理解する必要があります。シカと人の関係など生態系を保全管理するための計画やルールづくりが必要です。

4. ビジョン

4.1. 多様な植生からなる森と水辺のつながりが保たれ「多様な生きものが躍動する森」

- 尾根にはアカマツ林が連なり、斜面から谷には季節ごとに彩りを変える多様な落葉広葉樹林が広がっている。
- 適度に若返らせた異年齢の森林、異なる構造の森林が混在した、変化に富む森林空間が保たれている。
- 宝が池と谷の湿地や池の水辺環境がつながり、希少な湿性植物が生育している。両生・爬虫類などの小動物から大型の野鳥や哺乳類までがつながる生態系が維持されている。

4.2. 森とあそび、森にまなぶ、自然との対話から次世代につづく「知恵と生きる力を育む森」

- 様々な年代の人が、それぞれの目的で森に入り、自由にあそび、森を楽しんでいる。森の手入れにも関わりながら、自然との付き合い方、利用の方法、不思議や怖さなどの気づき、自然と上手く付き合う力を養う場となっている。
- 自らの手で森に働きかけることができる学びの場として、自然科学だけではなく文化も含めて総合的に学べるフィールドとして、様々な団体に利用されている。

4.3. 森の恵みに支えられた地域の「文化と歴史が継承されている森」

- アカマツやコバノミツバツツジの再生により、送り火等への利用が再開され、近隣の祭りや行事における森の資源の利用が増えている。
- 現代の暮らしの中で森林資源を活かす新しい文化が創造され、森の手入れで発生する材が森の内外で活用されている。
- 四季を彩る景観が保全され、春はツツジ越しに市街地が望め、市街地からは京都の森林景観の重要な構成要素であるアカマツ林が望める。
- 災害に対するレジリエンス（適応力）の高い森が人々の暮らしの安全を支えている。

4.4. 途切れることない「人の関わりと協働が魅力を創り続ける森」

- 森を利用することが、森の再生や保全につながり、それが森の魅力を向上させている。
- 森の資源を地域や公園利用者が利用できる環境と仕組みが構築されている。
- 誰にとっても居心地の良い開かれた場として、森と園地部分が一体的に愛着を持って利用され、多様な主体の間で交流が生まれている。
- 一定のルール（作法）が共有される中で、人や知恵、資金が集まり、森の魅力を創りだしながら森の課題解決に挑み続けている。
- 自律した個人が主体的に森づくりに取り組み、行政、教育機関、市民団体、民間企業などを巻き込んだマネジメントが行われている。

おわりに ～「宝が池の森」の保全再生に向けて～

今回作成した「森づくりビジョン」は、これで完成ではありません。宝が池の森を含む生態系や社会は常に変化するものであり、モニタリングにもとづく順応的管理を目指し、「森づくりビジョン」を適宜更新・深化していきます。さらに、「森づくりビジョン」をもとに、森づくりを实践する過程で、多様な主体が役割分担しながら森づくりに参画できる仕組みを構築していきます。

そのためには、多くの人々が宝が池の森に関心をもち、森づくりに参加する人の輪が広がることが大切だと考えています。宝が池の森で皆様をお待ちしています。

令和4年3月6日 「森づくりビジョン」初版公表